

混声合唱組曲 「地球ばんざい」

まど・みちお作詩 鈴木憲夫作曲 (2004年 カワイ出版)

【初演データ】

期日:2004年12月26日(土)

場所:川崎市麻生市民館(大)

合唱:登戸混声合唱団

指揮:片野秀俊 ピアノ:井熊康子

演奏時間:14分25秒

夢のまた夢だった委嘱曲が素人集団に火をつけた

2004年12月26日、登戸混声合唱団「ひとひらのあい」クリスマス・チャリティコンサート(創立25周年記念)のメインステージは、委嘱作品『地球ばんざい』の発表だった。作詩はまど・みちおさん、作曲は鈴木憲夫さんである。

まどさんは104歳の長寿を全うされ、今年2月28日に逝去されたが、童謡『ぞうさん』や『一年生になったら』でも世に知られる、とてもピュアな心を持ち続けられた詩人で、100歳で出された詩集には“どんな小さなものでも みつめていると 宇宙につながっている”と残されている。

登戸混声合唱団(通称“のぼこん”)の団員構成や実力(とても高いとは言えない)をお話し、テキストの選択もお願いした憲夫さんが、この詩を選んだと知らせてきたとき、「やっぱり、さすが」と心から納得したものだった。それはまた、憲夫さんの心情、感性とまさに共通するものであった。彼からも私の日頃の音楽観、人生観を理解していただいていると確信できる、うれしいものでもあったからだ。それに、まどさんは亡くなるまで、この“のぼこん”の主要活動地・川崎市多摩区に長く在住されていたことも、団員たちにより親近感を抱かせてくれたのだと思う。

✦ + ✦ + ✦

この年“のぼこん”は創立25周年を迎え、毎年地元で続けてきたチャリティコンサートのステージでぜひ当初の委嘱作品を発表したいという熱い想いに団員一同が燃えていた。

1980年に12名で発足した当団は、ほどなく4名にまで減少し、何度となく消滅の危機に瀕しながらもそのたびに復活し、8年目くらいからなんとかチャリティコンサートを開催できるまでになってきたとはいえ、自分たちが委嘱作品を持つなどとは思ってもやらず、雲の上よりはるか向こうの夢のまた夢のことであったのだが、私はこの団のさらなる向上のワンステップに委嘱を提案したのだった。

私と憲夫さんのめぐり逢いは、互いに20代、日唱(日本合唱協会)での若手作曲家の作品紹介コンサートの折で、曲は『地藏礼讃』だったと記憶している。年齢も近く、共に福島と宮城の東北出身ということもあり、初対面から旧友のような感覚で親しくなって、以後40年来の友人としておつき合いさせていただいてきた。



そんな彼が委嘱の話を即答でOKしてくれて、お願いした締切日時の半年も前に全曲を完成し送付してきてくれたのには、感激を通り越してただただ驚嘆するしかなかった。全国から引っ張りだこの忙しさの上、病気の奥さまの看病で大変なのに…。この律儀さには感動し、心から感謝の思いでいっぱいになった。このようにして混声合唱組曲『地球ばんざい』は完成したのである。

✦ + ✦ + ✦

団員たちはその誠意に奮い立ち、“これがのぼこんのメンバーなのか?”と私自身が驚くほどの努力と勢いと、ひたむきな結束力で次々と曲をマスターしていった。もとより年輩者の多い団で、男声のほとんどは60歳の定年を過ぎて初めて合唱の世界に飛び込んできた人たち。“ドレミ”も楽譜の読み方も、いわんや発声のハの字もわからなかった人も多い、この“のぼこん”が、8か月後には、第1ステージのグレゴリオ聖歌、ルネサンス・ポリフォニー曲、第3ステージのクリスマス・ソング集を含むコンサートで、委嘱作品全曲を暗譜で歌い上げたのは、大きな驚きだった。

こんな奇跡のようなことが起こりうるという人の想いの力に、熱いものがこみ上げたのを忘れられない。そして、その夜の打ち上げで、憲夫さんを囲んで酌み交わした美酒の味、肩を組み合せて歌ったうれしい想い出は、いつまでも私の心の宝石になって輝いている。

✦ + ✦ + ✦



「ひとひらのあいコンサート」はずっと続き、昨年末で26回を数える(写真は25回)

こうして新しい合唱曲としてこの世に産声を上げた『地球ばんざい』は、その後まもなくカワイ出版から発売され、少しずつ全国の合唱団に歌っていただけるようになり、昨年(2013年)全日本合唱コンクール課題曲集「名曲シリーズ42」の混声用に、その1曲目の『どうしてだろうと』が取り上げられるに至ったのである。

組曲4曲中唯一ア・カペラで作曲されたこの曲は、まど・みちおさんの悠遠で崇高な世界観と、鈴木憲夫さんの慈愛と暖かさやさしさで満ちている。

この作品が長く長く歌い継がれていくことを心から願いつつ。

(登戸混声合唱団指揮者 片野秀俊)